

ジャファー・ギヤシ  
建築学博士、NANAの準会員

# 日本とアゼルバイジャンの 架け橋となって



アゼルバイジャンーこの日本から約7,500キロ北西の、カスピ海西岸に位置する美しい国を私が初めて訪れたのは、国際石油開発帝石株式会社（INPEX）に副社長として入社した直後の、2009年9月のことでした。首都バクーでスケジュールの合間に散策した、世界遺産（文化遺産）に登録されている石造りの旧市街と、その向こうで建設が進む近代的な高層ビル群のコントラストに、深い感銘を受けました。

その後4年近くを経て、私はアゼルバイジャンの重要性を認識するとともに、INPEXとその参加する事業が、日本とアゼルバイジャンの架け橋のひとつになっていると実感しています。

以下、日本とアゼルバイジャンの関係を、エネルギーの観点からINPEXの事業等もご紹介しながら、お伝えしたいと思います。

ご存知の通り、アゼルバイジャンは石油及びガスを生産しています。2012年通年の石油とガスの生産量は、それぞれ約3.2億バレル及び172億m<sup>3</sup>（注：地下への再圧入分等を除く）です□。単純に2012年の日本の原油及びガス輸入量と比較すると、それぞれ約24%及び15%となります□。

エネルギー生産の主力は、カスピ海上のアゼリ・チラグ・グナシリ（ACG）油田及びシャフデニズ・ガス田ですが、首都バクー周辺の陸上部でも、20世紀初頭からの古い油田群が生産を続けています。

INPEXも参加するACG油田（次頁写真ご参照）については、1994年に国際コンソーシアムとアゼルバイジャン政府の間で生産物分与契約が締結され、1997年にチラグ油田で生産が始まりました。2012年の生産実績は、石油が約2.4億バレル、ガスが34億m<sup>3</sup>で、石油についてはアゼルバイ



ジャン全生産量の約75%を占めました□。

ACG油田から生産される原油（ACG原油）は良質で、国際市場における引き合いも多く、距離的に近い欧州のみならず、米州やアジア市場にも販売されており、これまでに何度か、日本まで運ばれてきたこともあります。

アゼルバイジャンは最近、カスピ海地域のエネルギー輸送でも、重要な役割を果たすようになり、下記の地図で示したように、バクーから隣国グルジアを経て、トルコの東地中海岸ジェイハン・ターミナルを結ぶバクー・トビリシ・ジェイハン（BTC）パイプラインは、主にACG原油を輸送するために建設され、2006年稼働しまし

た。全長約1,768キロで、途中標高2,800メートルの山岳地帯も通過します。また、一部のアゼルバイジャン産原油は、カスピ海対岸のカザフスタンやトルクメニスタンからタンカーで輸送された原油や石油製品とともに、バクー郊外からグルジアの黒海沿岸にあるターミナルまで、鉄道で輸送されています。

ガスについては、前述のBTCパイプラインに並走する形で、バクーからグルジアとトルコ国境まで、アゼルバイジャンのカスピ海沖で生産されたガスを輸送する南コーカサスパイプラインが稼働しているほか、今後アゼルバイジャンで予想されるガス増産を念頭に、欧州方面に向かう新たなパイプ



アゼルバイジャンの主要石油ガス輸出パイプライン (英BP社地図を元に作成)

ライン建設計画も具体化しつつあります。古来「火の国」と呼ばれ、往年の東西交易路が通ったアゼルバイジャンは今、カスピ海周辺で生産されたエネルギーを西に向かって輸送する、現代のシルクロードの重要な拠点となりつつあります。INPEXはナショナルフラッグシップカンパニーとして、日本のエネルギー安定供給に貢献することをミッション（使命）とし、2013年3月末時点

で、全世界27ヶ国において76プロジェクトを実施しています。アゼルバイジャンでの事業は中核のひとつで、2002年に前述のBTCパイプライン権益を、2003年にACG油田権益をそれぞれ取得、参入しました。日本からの距離や地形の関係で、ACG原油を日本へ直接持ち込むことはなかなか難しいのですが、欧州等の需要家との間で、ACG原油を渡す代わりに同じ価値の別の原油をアジア等で渡してもらうスワップ取引を通

じ、間接的に日本へ原油を持ち込むことで、日本のエネルギー安定供給に貢献しています。エネルギー資源の乏しい日本にとって、エネルギー生産国との中長期的に安定した関係の構築と維持が重要であることは、言うまでもありません。石油やガスの開発事業は、探鉱開始から生産終了まで数十年間にわたることも多く、安定した操業の実現には、エネルギー生産国との良好な関係が不可欠です。



私が、日本とエネルギー生産国の関係の重要性を意識しているのは、INPEXに入社するまでの約35年間勤務した、経済産業省での経験が背景にあります。35年間の約三分の一は、エネルギー関係の仕事に携わりましたが、中でも1973年の第1次オイルショック及び1979年の第2次エネルギーショックを通じ、日本のエネルギー安定供給の重要性を、身を以って知るとともに、中東以外の供給源の多角化の必要性を強く感じました。

アゼルバイジャンで、ACG及びBTC両プロジェクトにINPEXが参加することは、まさに供給源の多角化に合致するものです。私は両プロジェクトへの参画を誇りに思うとともに、これらのプロジェクトが、引き続き日本のエネルギー安定供給のみならず、アゼルバイジャンの更なる発展にも貢献することで、両国がともに繁栄していくための礎になることを、強く願っております。

日本とアゼルバイジャンの関係と言っても、それを実際に担うのは人です。私がアゼルバイジャンを訪れたのは、冒頭申



し上げた2009年9月、ACG油田15周年記念行事に参加した時のみですが、その際にも、国営石油会社SOCARのアブドゥラーエフ総裁をはじめ、多くの方々と面識を得ることが出来ました。日本では、10数年の滞日経験を有され、日本語のご堪能なギュルセル・イスマイルザーデ駐日特命全権大使と、親交を深めさせて頂いております。イスマイルザーデ大使は、東京におられる各国外交団の中で最も精力的に活動され、経済界をはじめ日本国内で最も知名度の高い大使のおひとりです。イスマイルザーデ大使はINPEXの事業に強い関心を示され、最近、新潟県上

越市に建設中の直江津LNG受入基地等を見学されました。イスマイルザーデ大使がINPEXの事業をご理解頂くことも、日本とアゼルバイジャンの関係深化へ貢献すると確信致しております。

日本とアゼルバイジャンは、エネルギーを通じて強く結びついています。この結びつきを実際に支えているのは人と人、そしてその間に生まれた信頼関係です。私はINPEXとともに、引き続き日本とアゼルバイジャンの関係発展に努め、名実ともに両国間の架け橋になりたいと思います。✿

以 上